

地方出版

アクセス

情報誌

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円
	(本体 136円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町 20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

地方出版文化功労賞奨励賞受賞

盛岡「caféモンタン」

— 小瀬川了平が注いだ最上級の芸術エッセンス

文／萬鉄五郎記念美術館 館長 平澤 広

café モンタンという存在

絵描きや詩人、ジャズ愛好家たちが集う「Café モンタン」を知るきっかけは、盛岡在住の美術家・大宮政郎が事あるごとに話っていた1960年代の様々なエピソードに端を発する。

「モンマス」と呼ばれていたモンタンの店主(マスター)こと小瀬川了平。彼が買ったばかりの新車のフォルクスワーゲンに友人を乗せ、勇んで東京を目指して出かけた。南下してまもない北上市内にさしかかったときの事、国道4号線の道路工事の段差に気づかず大ジャンプ。車は大破損しお釈迦と相成ったという。一方、一流品の本物志向の小瀬川が、最新デザインのテーブルや椅子、素敵な照明器具を求めて、東京に共だって度々出掛けたこと等々。なかでも衝撃だったのが、人気酒場となり大儲けしていた小瀬川が、仙台に支店を出すことになった。そのとき介入していた不動産ブローカーに騙されて手付金を持ち去られたばかりか、なんと3ヶ月間仙台で監禁され、店の売り上げを全部持っていかれたという。当然、これは事件となり、首謀者らは逮捕されることになったのであるが、何につけてもやるのが型破りで、ス



小瀬川了平ポートレート

小瀬川を物語る逸話である。それから一時期、競馬にも凝った小瀬川は、馬主となり中央競馬に出走していた。一着となって手綱を



『CAFÉ モンタン 一九六〇年代盛岡の熱きアート基地』著者：萬鉄五郎記念美術館(ほか編集・制作)／発行：社陵高速印刷出版部／定価：税込2,750円／ISBN：978-4-88781-142-3

引いてパドックを廻ったこともあったという。

いまだに折に触れて語り継がれる小瀬川了平という人物。彼が営んだ「caféモンタン」という店は、当時どんな存在であったのだろうか。その実態を記憶に留めておくばかりではなく、記録に残そうと思いついたのが、今回の「caféモンタン」編集の発端であった。さらに彼が、当美術館の地元、花巻出身ということも、それに拍車をかけることになる。

最新の芸術発進基地

1960年代の岩手の芸術運動は、盛岡大通り裏の「CAFÉ モンタン」が拠点であった。北東北のこの小さな Snackbar から、多様な表現活動のムーヴメントを発進し続けた。

店主のモンマスこと小瀬川了平は、1931(昭和6)年、花巻台温泉「台湯館(たいとうかん)」の次男として生まれる。東京大学文学部中退後の1956(昭和31)年、盛岡の大通り裏に「どん底」酒場をオープンする。新宿の同名の店舗を模したこの酒場の名物は、これも同じ名称の「どん底カク」(どん底カクテル)。しかし配合は小瀬川のオリジナルで、ピンク色の甘酸っぱくてシュワーと爽やかで、後から大人好みのハマりが口いっぱいには拡がるという女性受けする素敵なお飲み物だった。これが大人気で、日に4、500杯出ることも珍しくなかったという。「盛岡のどん底横町には、冬でも雪が積もらない」と巷に噂されていたほどで、夜ごと人が行きかえり賑わっていた。この繁盛店「どん底」を改装し、1959(昭和34)年に洒落たモダンな「CAFÉ モンタン」をオープン。設計者は、駿河台の明治大学裏の喫茶「レモン」と同じ方と言われ、小瀬川の粋な都会的センスが開花したこの店には、日夜、若手美術家や詩人、ジャズ・マンが集った。



オープン当時の「caféモンタン」1959年

イヴ・モンタンから拝借した店名が示すように、シャンソンの店としてス

スタートしたのだが、まもなくモダン・ジャズへとシフト。日本のジャズ評論の先駆であった清水俊彦が、毎月、新譜を抱えて来盛。店内でレコード・コンサートを毎回、昼夜2回催していた。記録に残るだけでも4年以上も通い続け、地元のバンドマンや音楽ファンを刺激し続けた。1966(昭和41)年からは地元ラジオ局で毎週、モンタン提供のジャズ番組が始まり、地方のジャズ発信基地となっていく。



ジャズ・レコードコンサート
(向かって左から、マスターの小瀬川了平、ジャズ評論家の清水俊彦、視覚詩の詩人・高橋昭八郎)

なによりも特筆すべきは、モンタンはオープン当初から現代美術の紹介に努め、店内の壁面や空間を使って作品展示を行っていた。1962(昭和37)年からは、「コンテンポラリーシリーズ」と銘打って東京や地元で活躍する美術家の個展を継続的に企画。そのラインナップを挙げると、池田龍雄展、末松正樹展、馬場彬展、村上善男展と、既成美術への抵抗と時代を切り開こうとする表現者が選ばれていることが特徴である。

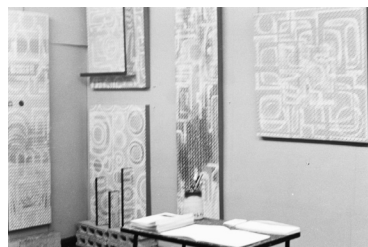
さらに1963(昭和38)年には、「モンタン美術賞」という45歳以下(2回目から制限なし)の美術家を対象に、新人発掘と支援を目的とする全国公募のコンクールを立ち上げる。審査員には新鋭美術評論家の中原佑介があたり、モンタン賞受賞者は作品買い上げに加え、銀座の「サトウ画廊」での個展が約束された。時代を担う才能の発掘というこの試みは、全国に向けた美術的アクションであり、地方からの挑戦であった。

第1回は32人86点の応募があったが、モンタン賞は該当なし。佳作1席が瀬川昌男、同2席が村山暢男、選外佳作に大宮政郎と高原光男が入っている。2回目はモンタン賞が吉野順夫(としお)、佳作に瀬川昌男、吉田武、森田洋子。3回目は、参加者62名185点の応募があり、モンタン賞に松尾一男、佳作第1席が松平憲機、岡田博、小林正治となっている。サトウ画廊の記録では、入賞翌年に吉野順夫、松尾一男の個展がそれぞれ開催されている。

モンタン賞は、第4回の募集要項までは準備されていたようだが、募集した形跡は見当たらず、残念ながら3回で終了してしまう。これらの入賞、入選者のその後を辿ってみると、活動が明らかな者が少ないなか、瀬川昌男が岩手の先鋭的な美術運動「集団N39」に加わり、その後も若手グループの「集団 COZUMO - 8V」(コズモ8ボルト)に積極的に関わっていたことが認められる。また松尾一男は、サトウ画廊での個展を



第3回モンタン賞公募用紙 1964年



第3回モンタン美術賞 松尾一男展
(銀座・サトウ画廊) 1966年

足掛かりにつなかりを深め、同画廊での数度の個展や同画廊企画のグループ展など何度参加している。このモンタン賞とサトウ画廊を結びつけた張本人は、この画廊に足しげく通っていた美術家の村上善男で、盛岡には「村上に逢いたければ、週末銀座に行け」という合言葉さえあったほどで、毎週末、夜行列車で上京し、岡本太郎をはじめ中央の美術関係者と交流を重ねていた。その親密度を示すように、モンタン賞の運営委員にはサトウ

画廊主も名を連ねている。このように音楽、美術といずれの企画も、盛岡という東北の一地方に留まらない、何処に出しても恥ずかしくない文化的プロジェクトとして成立していたことに注目しなければならない。

地方のスナックのイベントに取まりきれない文化的ムーヴメントを巻き興した小瀬川了平の本質は、どんな哲学に裏打ちされていたのだろうか。彼についての記録は、残念ながら非常に少ないので想像の域をでないが、彼の根幹をひも解けば、一流の食器で一流の食事を提供するという、幼いころから指折りのおもてなしで客人を迎えるという老舗温泉旅館の習わしを、日々目にし、耳にしていた。そのような環境的な素地を抜きに彼を語ることはできない。

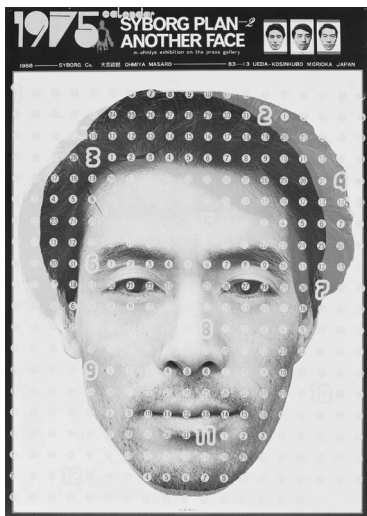
幼少期から育まれた知見と素養が、最上級のものを提供する場(サロン)の創出という、妥協を許さないこだわりと本物志向が、彼が目指した店舗経営の信念だったのではなか。それが美術や音楽、詩といった表現活動、いわゆるアートと結びつき、スナックの枠を超えて「café モンタン」という文化的なサロンとなっていったといえよう。

「café モンタン」に集った芸術家たち

当然ではあるが、小瀬川を支えた地元のキーパーソンたちの存在も忘れてはならない。前述した村上善男は、東京のアートクラブ会員で集団αに属する美術家。地元では先鋭的な美術グループ「集団N39」の一員であり、モンタン賞やコンテンポラリーシリーズなど、美術に関わるこの店のディレクションを一手に担っていた。彼が開催した企画は、毎回、薄いながらもパンフレットが必ず製作され、そこには評論家や美術家の作家論や紹介文が添えられていた。たとえスナックを会場とする展覧会であっても、記録に残すという印刷媒体の発行は、彼が手掛けた企画のお約束だった。また彼は、生前、事あるごとにモンタンの文化的意義をエッセイにしたため、後世にその事績の発掘を託した無二の人でもあった。

片や、村上と共に盛岡で美術グループ「集団N39」を結成し、岩手の美術界やデザイン界に新風を巻き起こし

ていた美術家でデザイナーの大宮政郎は、店舗デザインのアドバイザーとして度々小瀬川と上京。調度品の選定や店内ディスプレイに関わり、全幅の信頼を得ていた一人である。さらに彼は、小瀬川をはじめモンタン関係者を題材にしたユニークな作品も手がけ、この時代を代弁する貴重な資料としても注目される。



大宮政郎
《SYBORG PLAN-2 ANOTHER FACE》1968年
マスターの小瀬川了平と詩人の中村俊亮、視
覚詩人の高橋昭八郎の顔を組み合わせた作品
(サイボーグ)

詩人では、視覚詩の分野で世界的な評価の高い高橋昭八郎がいる。彼は北園克衛が主宰した「VOU グループ」に所属しており、モンタンでの「VOU 形象展」を招致。そこから先に紹介した同会員でジャズ評論家の清水俊彦との縁を取り持ち、モンタンをジャズ発信基地へと押し上げていった陰の立役者である。一方、モンタンのバーテンダーであった中村俊亮は、地元では高校時代から既に石川啄木の再来と注目されていた詩人で、彼を慕って多くの詩人仲間が集うサロンでもあった。1965(昭



モンタンのバーテンダーをしていた
詩人の中村俊亮

和40)年には、中村の第1詩集『愛なしで』が、東北の優れた詩作に贈られる「晩翠賞」を獲得、詩人としての地位を確立していく。このように地方の芸術運動に留まらず、中央とのネットワークを築いていったこの店から、美術や音楽、文芸といった芸術文化の華々しいコミュニティが形成されていったことは驚嘆に値する。

味覚の面でも特段のこだわりをみせた小瀬川は、オリジナルのコーヒー豆を使っていたことはいうまでもないが、いつでも誰でも、たとえ店員スタッフが早番遅番と入れ替わっても、美味しいコーヒーを提供できるようにと、当時日本では珍しかった高価なアメリカ製のコーヒー・マシンを導入。さらに、市内でいち早くソフトクリームを機械を購入して提供、市内唯一のソフトクリームの店として子どもたちの評判となっていた。

前述した彼が開発した「どんカク」に加え、「盛岡冷麺」に対抗して二日酔いに嬉しい温麺として開発したのが、辛くて熱いスープ・スパゲッティ「ア・ラ・モンタン」で、小瀬川の後を引き継いだ現在の「モンタン」でも今なお提供され、盛岡のソウルフードとして市民に愛されている。このようにユニークなアイデアと先見性で盛岡の新たな味覚を創出していったことも忘れてはいけない。

数々の伝説として語り継がれてきた盛岡のスナック「café モンタン」とそのモンマスこと小瀬川了平。そして、この店に集った芸術家たちとの華やいでいた時代の足跡をたどり、この小さなスナックが果敢に挑んだ文化的意義を発掘しなければ、岩手の文化史にポッカリ穴が開いてしまうのではないかと。今まで岩手の美術史にも、これまで全く記されてこなかったこの文化的コミュニティの意義を、戦後美術の一頁に記したいと編まれたのがこの一冊である。

一冊に込めた思い

今回、「café モンタン」を出版する

にあたり心掛けたのが、当時この店に関わったアーティストたちの生の声である。この店に集った美術家たちの当時の表現とはどのようなものであったのだろうか。それらの実作品の発掘に加え、彼らが書き記したエッセイや印刷物など、当時を物語る実物資料を提示することによって、リアルにこの店の事績を追体験できるように心がけた。それゆえ私の解説や論評は極力最小限にとどめ、それよりも当時のモンタン、または盛岡という街の生の息づかいを、読んで、観て、感じて欲しいとの思いを込めて編集にあたった。本書は、もとより当美術館の企画展覧会のカタログとして出版されたもので、展覧会の会場写真を加えることで、会期中に来館できなかった多くの方々に展示の状況や会場の熱気を伝えたいと願った。

出版後は、色々な方から連絡を頂いた。特に東京のあるギャラリーでは、たいそう気に入って頂き、大量に購入して色々な方々に販売やら配布やらとご尽力くださった。また、「知らないで購入したら、平澤さんが出した本だったんだね」と30年ぶりに連絡してくれた方もいた。一方、地元



「モンタン」オリジナル・スパゲッティ
「ア・ラ・モンタン」

盛岡の書店では、一時期、売り上げベスト10入りしていたこともあったほどで、「ネットでは、もう2倍以上に跳ね上がってるよ!」とメールをくれた他館の学芸員もいた。

なによりも今回の出版にあたり、言葉では表せないほど多大なご協力を頂いたのが、出版元の杜陵高速印刷である。さらに、地方・小出版流通センターを通じて全国に販売ルートを拡大し、この本を多くの方々が手に取る機会を与えていただき、両社には感謝しきれない。加えて、降って湧いたプレゼントのような「地方出版文化功労賞奨励賞」を受賞することができたのも、両社のご助力あってのことと、この場を借りてお礼を申し上げたい。

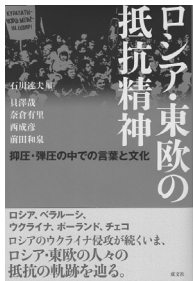
*

(ひらさわ ひろし／萬鉄五郎記念
美術館館長)

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『ロシア・東欧の抵抗精神—抑圧・弾圧の中での言葉と文化』 ●石川達夫 編



まえがきのタイトル、「干からびた荒地に言葉の滴（しずく）を」が、この本に込められた思いを象徴している。ロシア、ベラルーシ、ウクライナ、ポーランド、チェコの文学と思想は、苛酷な抑圧と弾圧のなかで、強固な抵抗精神で絞り出した言葉を、干からびた荒地に滴を落すようにして形成されてきた。本書は、これら諸国の抵抗精神と文化活動の系譜に光を当てたものである。

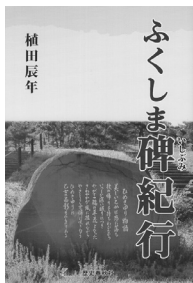
明治以降私たちは、ロシア近現代文学に親しんできた。だが、抵抗精神への認識を問われるとはなはだ心もとない。プーシキンの詩「私は荒野に自由の種を蒔いた」は、体制批判にとどまらず、「自由の意味や価値を理解せずに安穏な奴隷生活を続けている民衆」にも向けられたものであるの指摘に胸を衝かれる。まして東欧文

学への理解の乏しさを思い知らされる。ベラルーシでは1920年代に多くの文学者が粛清されて「詩人銃殺の夜」と呼ばれた。ウクライナは、1930年の見せしめ裁判で膨大な犠牲者を出し、いまそれが明らかにされて「銃殺された文芸復興」といわれる。支配と圧政、解放を繰り返したポーランドとチェコでもおびたしい血が流されている。

絶望的な状況の中で命をかけて発せられた言葉の滴は、過去からの声として、「いままさに弾圧のもとにある人々の精神の糧」になっているという。はかなげにみえる滴であるが、やがて大河となることを信じて、いままも絶え間なく落とし続けられている。(飯澤)

◆ 1800円・四六判・174頁・成文社・神奈川・202309刊・ISBN9784865200652

『ふくしま碑紀行』 ●植田辰年 著



碑というものは日本中に数多あるわけですが、本書は著者が自らの足で巡った昭和以降に建立された150以上の碑のうちから、福島県に存在する33の碑を紹介しています。紹介されている碑の中には東日本大震災の記憶をとどめるために建立された碑もあります。

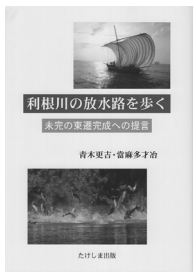
とりわけ南相馬市は多くの慰霊碑があり、原町区北泉の「東日本大震災犠牲者慰霊碑」が紹介されています。また会津坂下町には浜通りの葛尾村からの避難民を受け入れたことへの「感謝の碑」があり、あの震災の影響の広さをいま一度思い起こさせます。そのほかにも猪苗代町をかつて走っていた「沼尻軽便鉄道記念碑」や会津美里町の「石川啄木碑」など、様々な碑が紹介されています。なかには養蜂家がミツバチの供養のために建立した「みつばちの碑」、あ

るいは医療用の実験動物である「シロネズミの碑」などもとりあげられています。必ずしも有名な人物や物にまつわる碑ばかりではありませんが、著者はそれぞれの碑の背景も掘り起こして、それがどのような由来を持つものかについても解説してくれます。なぜ石川啄木の碑が会津にあるのかもそこで明らかにされていますよ。もちろん碑の字体や造形にも多様なものがあり、碑の持つ意味だけでなく碑そのものにも注目すべきポイントがあるということにも改めて気づかされます。ひとつひとつの碑の解説を読みながら、それを建立した当時の人々の心にも、ひととき思いを巡らせてみてください。

(副隊長)

◆ 1500円・四六判・163頁・歴史春秋社・福島・202309刊・ISBN9784867620267

『利根川の放水路を歩く—未完の東遷完成への提言』 ●青木更吉・當麻多才 著

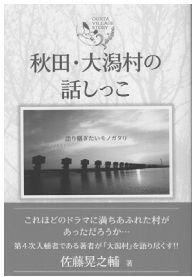


利根川は大水上山を水源として関東地方を北から東へ流れ太平洋にそそぐ、延長322km、流域面積16,840km²、日本一の大河である。昔から流域には農業用水など多くの恵みを与えてきたが、その反面幾度となく氾濫し、多くの人々に水害の苦しみを与えてきた。天正18年(1590)江戸に入った徳川家康は物資を運ぶために、利根川を江戸湾から銚子へ流路を変える東遷を図り、関東郡代たちは承応3年(1654)に完了。この東遷により水害が増加したという。これまで水害防除のため多くのダムと放水路が築造された。放水路とは河川の途中から新しく人工的に開削し直接的に他の河川(海)に放流する水路のことである。この書では、江戸川の放水路(幸手放水路・首都圏外郭放水路・坂川放水路など)、利根川上流の放水路(滝川第1・

第2放水路・葦川放水路など)、利根川中下流の放水路(小野川放水路・鹿島掘削工事など)、印旛沼掘削工事を取りあげ、利根川本流下流域には放水路はなぜないのかと迫っている。利根川下流域放水路の計画は、実際には1939年に事業化されている。それは、千葉県東葛飾郡湖北村から釜ヶ谷村を経由して船橋・津田沼市町境にて東京湾と結ぶ幅員300m、延長29kmの放水路、途中で分岐して印旛沼へ接続する5kmの水路の計画であった。一部着工されたものの、第二次大戦の激化によって一旦中止された。著者たちは、この利根川の放水路が竣工すれば、利根川の水害は減少するとその完成を熱望する。(古賀邦雄・古賀河川図書館)

◆ 2400円・A5判・228頁・たけしま出版・千葉・202309刊・ISBN9784892511173

『秋田・大潟村の話しっこ』 ●佐藤晃之輔 著



秋田県大潟村は、日本第二の広さを誇った八郎潟の湖底から大地が作られて生まれた自治体（昭和39年誕生）で、その風土は独自性が強い。干拓構想が浮上した頃（昭和20年頃）には食料増産だった旗印は、集落が安定した頃（昭和45年頃）には新しい農村のモデルに変わっている。村の人口は3000人、農家の戸数は500戸、田圃の平均面積は15ヘクタール超で安定している。

本書では、大潟村に移り住んで54年間暮らした農家の著者（昭和17年生まれ）が、八郎潟干拓の歴史から、村の誕生、入植、農業のこと、現状とこれからのことなど、私事を交えながら、さまざまな事柄について語り尽くしている。

新たに生まれた大規模な農村に対して、姿を消しつつある小さな農村は全国各地に無数ある。著者が生まれ育った県南部・由利本荘市の山間の集

落（いりかきざわ）祝賀は、昭和20年代には28戸150名以上が暮らし、田圃の平均面積はおおよそ1町歩（1ヘクタール）であったが、令和5年には6戸12名になり、最後の農家も耕作を止めたという。

時はとてもゆるやかに進むので、住む町の変化はなかなか気づきにくい。しっかりと振り返ることから「こんなに変わったんだなあ」と気がついて、それとともに新たな気づきが生まれる。本書は大潟村、広くは農業や農村のより良き未来を考えるうえで、貴重な資料となることだろう。

(HEYANEKO)

◆1500円・四六判・246頁・秋田文化出版・秋田・202310刊・ISBN9784870226128

『脳とこころ — 御巢鷹に逝った科学者』 ●上毛新聞社編 / 五十嵐啓介・小泉浩一 取材



1985年8月の群馬県御巢鷹の尾根で起きた日航機墜落事故で亡くなった乗客乗員250人の中に一人の脳科学者がいた。塚原伸晃（享年51歳）である。それまで、大人になったら神経細胞は発芽しないとされていた定説を覆し、発芽は大人でも起こることを明らかにした。「脳の可塑性」は今では当たり前のように耳にするが、この塚原の研究が起点になっていたのである。塚原のライバルで2000年のノーベル賞受賞者のエリック・カンデル（コロンビア大）は、塚原には先見の明があった、と言っていたという。塚原は当時日本の脳研究の行く末を担っていた。国の特定研究「神経回路網の可塑性」を1987年から始める予定だった。総責任者として最終的な打合せに文部省（当時）を訪ね、大阪への帰途に事故にあった。その研究と唯一の

著書『脳の可塑性と記憶』は後進に多大な影響を与えた。

本書では、この塚原の研究を軸にしてその影響下にこの分野で先端を行く多くの研究者が取材されている。インタビューでは「日本の神経科学界にとって大きな損失だった。」「まだ若手の教授がこれからという時に亡くなった。日本の自然科学、とりわけ基礎医学にとって非常に大きな損失だった。」「日本の神経科学は、これで10年遅れた。」と皆口々に塚原の死を悼む。塚原の死の翌年、その業績をたたえ、脳と生命の解明に挑む若手研究者を顕彰する塚原伸晃記念賞が創設された。本賞は現在、脳神経科学の分野で登竜門になっている。(N)

◆1620円・四六判・248頁・上毛新聞社・群馬・202309刊・ISBN9784863523401

『利尻島から流れ流れて本屋になった』 ●工藤志昇 著



日本最北の地である北海道・稚内の左横、日本海に浮かぶ利尻島。火山が噴火してできた島で、地名はアイヌ語の「リイ・シリ（高い・島）」に由来しており、漁業と観光が基幹産業。ウニ漁と昆布漁が盛んで、とりわけ昆布は高級品として全国的にも有名。島の中央には「利尻富士」と呼ばれる美しい利尻山が聳えている。

その利尻島で生まれた著者は三人兄弟の末っ子として中学卒業まで島で過ごし、札幌の高校へ進学、金沢大学を卒業後、研究者を志すが叶わず、札幌へ戻り、書店員として働き始め約十年になる。多忙な日々の中、ふとした瞬間に浮かんでくる故郷の記憶や職場で感じたことなどを綴ったのが本書。祖父が採ってきたウニの殻割りを手伝い、自他共に認める“プロ級ウニ割り少年”だった頃の思い出。年に何度も観る大

好きな映画『パッチ・アダムス』から想起される中学時代、難病で札幌の病院に入院した次兄のエピソード。弱音など吐かず、いつも周囲を笑顔にさせ、病を克服。今は故郷でやはり誰かを元気にしている、と彼の生き方を淡々と語る。また、胆振東部地震やコロナ禍の中、書店員の仕事とは不安に負けない強い心を持ちたいと願う人の手助けをする仕事だと気づき、“書店は故郷だ。すべての人がどう生きてきたかを思い出せる場所が書店である”という言葉には故郷と書店への思いが表れている。年に二回ほど帰省する著者。この先も昆布のような味いのある情景を示してほしい。(Y)

◆1700円・四六判・165頁・寿郎社・北海道・202310刊・ISBN9784909281555

売行良好書

期間：2023年10月15日～11月14日

※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

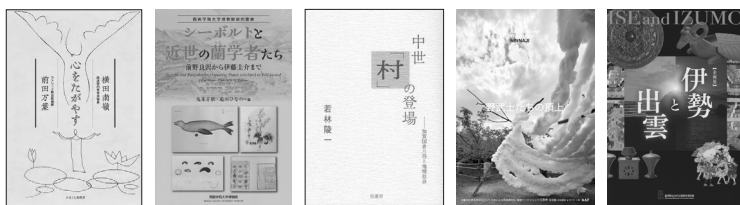
【出荷センター扱い】

- (1)『岩手日報特別報道記録集 BIG FLY 大谷翔平 プレイバック 2023』1300円・岩手日報社
- (2)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社
- (3)『ことばの遊園地』1500円・石風社
- (4)『日本産化石図鑑 採集と標本の作り方』2000円・南方新社
- (5)『起きられない朝のための短歌入門』1700円・書肆侃侃房
- (6)『利尻島から流れ流れて本屋になった』1700円・寿郎社
- (7)『そらのどうぶつえん』1300円・コミニケ出版
- (8)『空間の未来』2000円・クオン
- (9)『那覇の市場で古本屋』1600円・ボーダーインク
- (10)『水上バス浅草行き』1700円・ナナロク社
- (11)『シベリア鉄道 三度目の正直』2000円・17出版
- (12)『振り返れば未来 山下惣一聞き書き』2000円・不知火書房
- (13)『浄土真宗の智慧』1200円・アートヴィレッジ



【ジュンク堂書店池袋店 地方出版社の本—センター扱い図書】

- (1)『心をたがやす』1500円・かまくら春秋社
- (2)『シーボルトと近世の蘭学者たち』600円・花乱社
- (3)『中世「村」の登場』2700円・桂書房
- (4)『建築学生ワークショップ 仁和寺2023』1818円・アートアンドアーキテクトフェスタ
- (5)『伊勢と出雲』2000円・ハーベスト出版
- (6)『サルタ彦大神と竜』2000円・大元出版
- (7)『新版 奥多摩登山詳細図 東編 全148コース』900円・吉備人出版
- (8)『ジソウのお仕事 データ改訂版』1800円・フェミックス
- (9)『80ジジイの「どう生きる」これからの二年』1800円・ブックショップ「マイタウン」
- (10)『新装版 奥武蔵登山詳細図 全130コース』900円・吉備人出版
- (11)『上宮太子と法隆寺』2778円・大元出版
- (12)『沖縄の身近な植物図鑑』4500円・ボーダーインク
- (13)『出雲と蘇我王国』2200円・大元出版
- (14)『明治維新と西郷隆盛』2130円・大元出版
- (15)『OKINAWA 365 沖縄の毎日を旅する写真集』3650円・編集工房東洋企画



以下ホームページ等でも各種情報提供を行っております。ご利用ください。
 URL : <http://neil.chips.jp/chihosho/> X (旧ツイッター) 公式アカウント : @local_small

トピックス — ★★


▼2018年の【大谷翔平 挑戦】から数えて4冊目となる岩手日報社刊の大谷翔平報道記録写真集【BIG FLY 大谷翔平プレイバック2023】がこの11月に刊行されました。ISBN 9784872018455 本体価格1,300円。




「2023年3月の第5回ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)で日本代表3度目の制覇に貢献、メジャー6年目の今季も

投打の大黒柱として開幕試合からフル回転した大谷翔平。右肘じん帯損傷が発覚し9月4日から欠場したものの、2位に5本差をつける44本塁打で、自身メジャー初タイトルで日本選手初となる本塁打王に輝きました。6月に球団新記録となる15本塁打を放ち月間 MVP と週間 MVP を同時受賞。7月はダブルヘッダー1試合目で完封、2試合目で2本塁打を放つ離れ業を見せて2カ月連続の月間 MVP。8月には前人未踏の2年連続「2桁勝利、2桁本塁打」と10勝40本塁打を達成し、大リーグに新たな歴史を刻みました。本書は3月30日の開幕試合から本人最後の出場となった9月3日までの135試合全戦績を網羅。岩手日報掲載の写真を多数収録した誌面で記憶と記録に残る2023シーズンを振り返ります。」(Books 出版書誌データベース紹介文より)。そしてこの11月16日(日本時間17日)には、米大リーグの記者投票による MVP の、2年ぶり2度目の受賞が発表されました。満票選出とのこと。現地メディアの間では満票で受賞するかどうか注目されていたところですが、報道によれば、1931年に創設され、93年の歴史を持つ同賞では2度目の満票選出は史上初となる偉業だそうです。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。



ネット通販で地方・小出版流通センター扱い本がご購入いただけます。



honto.jp

hontoではお客様の読書スタイルにあわせて電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントはネットでも書店でも使えて、貯められます。地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットでもご購入いただけます。くわしくは honto.jp へアクセスください。

